



日本とドイツ ふたつの わたしのふるさと “Meine Heimat”

デュッセルドルフ日本人学校 勝野 里穂

デュッセルドルフは、ドイツ西部のノ르트ライン＝ヴェストファーレン（NRW）州の州都です。経済や産業が発展し、日本企業も多く進出しています。街の中心には日本料理店や書店が並ぶインマーマン通りがあり、毎年「Japan Tag（日本デー）」には国内外から約60万人が訪れます。欧州でも有数の日本人コミュニティを有し、デュッセルドルフ日本人学校には小学部・中学部あわせて400名を超える子どもたちが通っています。日本のカリキュラムに加えて、ドイツ語とドイツの文化理解にも取り組んでいます。

私はこの環境を生かし、地域を教材にした学習を進めてきました。小4社会科では自分の都道府県を学びますが、本校の子どもたちは日本各地や世界中から集まっているため共通の地域がありません。さらに、保護者の都合で転居を繰り返している子どもや、日本に一度も住んだことがない子どももいて、自分のルーツやふるさとが曖昧な場合もあります。そこで、縁あってデュッセルドルフ、NRW 州に暮らしている今、この地を「Meine Heimat（わたしのふるさと）」ととらえてほしいという願いから、地域の自然・産業・文化を学んでいく計画を立てました。

教材の中心は、1980年代に本校の教員や日本人コミュニティによって作成され、その後も改訂が続けられてきた副読本『私たちのデュッセルドルフ』です。浄水施設や清掃工場を見学し生活を支える仕組みを学びました。またゾーリングゲン市で刃物工場で伝統工芸を、紅茶工場（TEE KANNE）では産業の発展を体験的に学びました。こうした学びは、子どもたちに地域をぐっと身近に感じさせてくれました。また、詩人ハイネや音楽家シューマンなど文化に貢献した人物の足跡を訪ね、作品に親しみました。ドイツ語科と連携し、カーニバルなどの伝統行事を学び、社会科と語学を結びつけることができました。

まとめとして行った「ふるさと PR ポスター」では、日本とドイツの両方をふるさととして紹介する子どもがたくさんいました。子どもたちにとって、地域を学ぶことは、この地を「自分のふるさと」と感じるきっかけとなりました。

校歌の一節に「日本の友とドイツの友をつなぐ歌声」とありますが、まさにその言葉のように、子どもたちは自然に二つの国をつなぎながら日々を過ごしています。ドイツでの経験を通じて育った関心や愛着が、将来の大きな財産になると信じています。これからも地域に根ざした学びを大切にしながら、子どもたちと共に成長していきたいと思っています。



アルトシュタット（旧市街）見学



浄水場見学の様子



ゾーリングゲン はさみ工場見学



NRW 州についての劇を発表する様子
学習発表会